



Title	<書評>酒井直樹著『日本思想という問題 翻訳と主体』(岩波書店、1997年)
Author(s)	遠藤, 智昭
Citation	大阪外国語大学アジア太平洋論叢. 1998, 8, p. 281-288
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99920
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〔書評〕

酒井直樹著『日本思想という問題 翻訳と主体』

(岩波書店、1997年)

遠 藤 智 昭*

この本の中で酒井氏が一貫して取っている基本的スタンスは、反ナショナリズムの立場である。ナショナリズムという言葉がそれでも狭すぎるというならば、あらゆる集合的アイデンティティへの根源的批判が、極めて綿密な論理構成に則って行われているのがこの本である。そしてこの基本的スタンスから、酒井氏は一般に語られている「日本思想」というもののいかがわしさ、一見価値中立的に思われる「翻訳」というものの政治性を明らかにしている。

従って、この本に関して何かを言うとすれば、直接的にこのナショナリズムの問題を主題とするのが最も近道であろう。しかし、ここではあえてそうした道を選ばないことにする。その理由は、そうした読みがこの本を手にする者にとってあまりにも当然のことであるからというだけではなく、そうした読みはこの本に対しても不十分であると考えられるからである。

その代わりとしてここで提示してみたいのは、この本を「語り」のエチカについての論考として読む視点である。反ナショナリズムの書としての読みだけでは不十分なのはそうした読みが往々にして読み手に対して何の負荷も与えないからである。それに対して「語り」というのは我々が日常行っている／行わざるを得ないことであり、従って「語り」の問題性を知らしめられた者は、それから意識的に目を背けることにするか、その問題を引き受けるか、いずれにせよ何らかの負荷が自分にかかっていることを自覚せざるを得ないのである。そして、そうした読みこそが、酒井氏が肯定的に「シュタイ」と表現するもの役割を我々が担うことには繋がると思われる。

*東北大学大学院 国際文化研究科 博士課程後期在学中

I

酒井氏は「語り」に関して明確に二つのことを分けている。その一つは「語りかける」こと (to address) であり、もう一つは「伝達する」こと (to communicate) である。われわれは無意識のうちにこの二つのことを混同していないだろうか。あるいは「語りかける」ことは必然的に「伝達する」ことに繋がると思いこんではいないだろうか。しかし、このことは決して自明ではない。「語りかける」ことはメッセージが相手すなわち宛名 (address) に到達することが全く保障されていないのである。にもかかわらずわれわれはこの事を普段自覚せずにいる。それが可能なのは communicate という言葉自体を見ればわかるように、伝達とはつねに一体化 (communion) との連想で行われ、均質言語的な聞き手への語りかけを想定しているからである。したがって、「語りかける」ことがそうした均質言語的な聞き手への語りかけだけに終始するとき、そこにある「語りかける」ことの可能性と「伝達する」ことの困難さの落差は隠蔽されてしまうのである。

無論、酒井氏はこうした均質言語的な空間に安住することを批判する。しかし、では彼がある種の無秩序を肯定するのかというとそうではない。確かに、非均質言語的な空間では、伝達は常に失敗に終わることが想定されている。だが、その失敗こそが「われわれ」(均質言語内のわれわれではなく) のもっとも根源的な社会性の告知であるというのである。酒井氏はジャック・ランシエールを援用して、われわれを結びつけるのは伝達がいかに困難なものかを自覚した上でもなお伝達しようとする意思なのだ、という。そのためには、むしろわれわれは互いに離れていくなくてはならない。彼が積極的に肯定しているのは無秩序ではなく、まさにそうした意志によって参加を促され、形成される混成的な共同体なのである。そして、こうした共同体の「われわれ」を樹立するための語りかけの探索こそが、酒井氏の一つのテーマであると明言されている。

II

こうした問題意識はこの本の書名に含まれている、「日本思想」「翻訳」「主体」と言ったテーマにも通じている。

日本語というのは一つの均質言語的な空間と考えられるが、そもそもこうした

閉鎖的な均質言語的空間はそれほど自明な、確固としたものではないということを酒井氏は暴露する。一つの国語というようなものは、いかなる意味でも自然発生的に生まれたものではない。それは彼が「対一形象化の図式」と呼ぶ機制によって、それも翻訳の仕事を通じて作り出されたものなのである。

ここで誤解されてはならないことは、翻訳というものの位置づけである。通常翻訳は、すでに実体としてある二言語間を媒介する、伝達の一形態であると考えられているだろう。だが、実は逆に翻訳こそが言語の自立的で閉じられた統一体の制度を成立させるのだと酒井氏は言う。日本語の例で言えば、18世紀以前には「日本人」によって話される「日本語」なるものは存在していなかった。しかし、それが中国の言葉との対照関係によって、それとは異なるものとして初めて概念化（対一形象化）されていったのである。

また日本思想史というのも、同様の「対一形象化の図式」によって生み出されたと考えられる。つまり、日本語対外國語という対称的二項対立によって内と外をわける、「国民」あるいは「民族」という制度そのものを自明視する近代的な言説においてのみそれは成立するのである。そしてそれは具体的には近代世界における西洋自民族中心主義に対する同一化と反発の力学のなかでのみ成立したのである。

従って、翻訳とは伝達の作業などでは決してなく、話し手と聞き手の間にもともとあった非連續性（非共約性）を連續化し認知可能なものとする社会実践の一つに他ならないのである。

III

しかし、ではそうした社会実践としての翻訳を担う翻訳者とは何なのだろうか。実はこの翻訳者の立場こそが「主体」の性格を明らかにする。

問題となるのは「主体」という言葉の翻訳と「翻訳」の行為の主体の位置という二つの審級である。

まず、一つの名詞としての「主体（subject/sujet/Subjektなど）」の翻訳について考えてみると、この言葉に対しては「主体」という訳の他にも「主語」「主題」「主觀」「臣民」など複数の候補が上げられる。しかもこれらの語の英語への再翻訳がしばしば subject とはならないのである。このことは「主体」という概念が持つ本質的な過剰を示していると酒井氏は言い、こうした過剰を雑種性と呼ぶ。そしてそうした雑種性を排除・抑圧され、ある一つの言語の中に収まっ

た概念としての「主体」に対して、雑種性を帯びたままの概念を区別して「シュタイ」（発話行為の身体（*the body of enunciation*））と表現している。

そうであるならば、まさにこの語を翻訳しようとする時、翻訳者は言語の統一性も言語統一体の加算的複数性も当然視できない位置に立つことになる。その時翻訳者は内部的に分裂しており、安定した位置を欠いているのである。こうした翻訳の行為の主体を酒井氏は「乗り継ぎする主体（subject in transit）」と呼ぶ。そこでは人格（人称）の振動あるいは非限定性が起こるのだが、こうした振動は均質言語的な空間における「われわれ」の不安定性を標しつづける。しかし逆に言えばそのことは、翻訳の行為こそが人々が「他なる者」へ開かれていること（＝社会性）の行為であるということなのである。

IV

この様な基本的立場から酒井氏は和辻哲郎の思想、テレサ・ハッ・キュン・チャの『ディクテ』、そして戦後詩についての検討に向かう。

とりわけ和辻の思想への批判は容赦ない。酒井氏は和辻の人間学は国家護教論であり、そこには社会性への配慮が徹底的に欠如しているという。「社会性」とはいわば、すでにある「信頼」からはなれ、「赤の他人」との間に新しい社会関係をつくるということなのだが、そこには必ず「他者の超越」という契機が含まれている。それはどんなに多くの述語（例えば、「妻である」「母である」「客である」「上司である」）を加えても、主語=主体として一人の人間を規定しつくすことはできないという意味であり、従ってそこには避けられない「非決定性」があるということである。また同じことは私の私に対する関係についても言える。私は一つの非分割（individual）ではなく、無数の分裂と過剰を含んだ存在なのである。しかし、和辻は「信頼は人間関係の上に立っている」とし、こうしたあらゆる社会関係・間柄に織り込まれた、投機を必要とする非決定性を隠蔽しようとする。だがこうした非決定性の抑圧は実は他者の他者性の拒絶であり、他者への尊敬の拒絶、社会性そのものの拒絶を引き起こすのである。既に述べたように、そもそも和辻が民族共同体の同一性を規定するときに依拠する体系的な統一体としての日本文化・日本語・日本人などという観念はせいぜい二世紀あまりの歴史をもつに過ぎない。このような脆弱な前提に立つ和辻の文化主義が抑圧するのは、文化的、民族的、国民的差異が刻印されているにもかかわらず、単独存在者（singular beings）としてありうる人々が、互いに「コミュニケーション」する他者

に開かれてあることの様式、つまり人々のネットワークの可能性である、と酒井は断じている。それは結果として、和辻の倫理学が「離散民」や「国家」の保護のない人々に対する残虐性を正当化するということでもある。

V

こうした和辻批判とは対照的に、チャや戦後詩への酒井氏の態度は好意的なものである。

朝鮮系アメリカ人移民の作家であるテレサ・ハッ・キュン・チャの『ディクテ』は多言語によって書かれた、詩的テクストである。読者はこの本が全体として何語で書かれているのか、分からなくなってしまう。それは、一つの「自然」言語内には均質性があるはずという人々の期待を搔き乱し、均質言語的な空間を支えている構造、すなわち言語の選択ということの中には政治的強制の歴史が覆うべくもなく存在しているということをあらわにする。

チャの作品がこうした形で書かれざるを得なかった理由は、彼女が母語を奪われていたため発話行為において身体性を捨て去ることが不可能だったからだと酒井氏はいう。ここで身体性とは同定不可能なノイズ、調和的共生関係が母の言語と自分との間に形成されることを阻害する物質的抵抗として定義される。すなわちこれは、先に見た「シュタイ」を重なるものである。チャにとって身体は外国语を完全に内面化することを拒むものとして、「シュタイ」として立ち現れてくるのである。

ただし、そうした身体はそれを拠り所として彼女の主体性が構成されてくるような実体でも同一性でもない。それは彼女が「他者」に対してもつ社会関係に依存し、彼女に「思いとどまる (desistance)」ことを要請する「抵抗としての身体」なのである。

しかし、実はこうした身体／シュタイの不透明性こそに可能性がある。身体性は、対一形象化の図式に働きかけ、それを変えて行く可能性の一つなのである。それは「間にあること」の空間、「国民共同体」に回収されない、混成的な共同体の存在を開示するのである。

VI

このようにチャへの評価が一つの可能性の提示であるとすれば、戦後詩についての酒井氏の論考は「語り」を巡る一つの警鐘であるように思われる。

戦後詩とは十五年戦争ないし第二次世界大戦敗戦後二、三〇年間に生み出され

た日本の詩のことであるが、こうした詩は一つの社会的行為・歴史的実践であると彼は言う。そこで問題となるのは死をいかに語るかという点である。

酒井氏は死を本質的に共同体の外部に位置し、絶対的他者性を持つものとしている。共同表象の制覇的本来性（ヘゲモニー）は死によって相対化される。死が体系の境界を指し示し、実証し、共同表象の基本的メカニズムを明らかにする。その意味で死はクリティカルな（＝批判的＝境界的なる）経験なのである。そしてそうであるならば、死者たちの遺言は共同体内部で理解される（伝達される）ようなものであるはずがない。

戦後詩はこうした死のクリティカルな性質を詩のテクストの中に構造として組み込む。その時詩人は死者と同化し、死者たちの遺言が少しも理解されないことを告げる（語りかける）遺言執行人・死者の代理人になるより他ないのである。

いかに厳粛に死者がネーションによって祭られようとも、死者が現存の体系（エコノミー）とりわけナショナルなものに回収されてしまうならば、それは歴史上の浪費なのだと酒井氏は警告している。

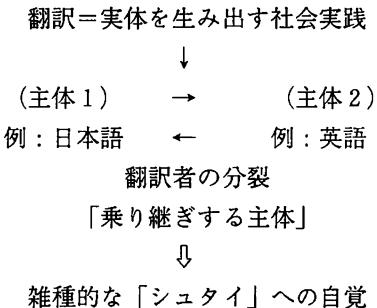
VII

さて、以上がこの本のおおよその概略であるが、では結局われわれはいかに語ればよいのか、この本を「語り」のエチカについてのテクストとしてよむとき、それはどのように提起されるのだろうか。そのことを考えるためにまずここまで使われてきた諸概念を一旦整理しておこう。

今回ここでは酒井氏の使う諸概念を網羅的に取りあげたわけではないが、やや乱暴に言えば、基本的にこの本における彼の理論の諸概念は下記のよう振り分けることができる。

(A)	(B)
伝達すること	語りかけること
均質言語的空間	非均質言語的空間
主体	シュタイ
日本人・日本語	
ネーション	混成的共同体
	身体性
	死
(和辻の人間学)	(チャの詩的テクスト・戦後詩)

翻訳およびそこで働く「対一形象化の図式」は(A)の側を成立させる機制である。酒井氏はこの存立構造の虚構性を暴露することによって、既存の共同体の相対化・価値下落に成功している。そして、ここでは翻訳者は特異な役割を果たすことが明らかにされている。(下図参照)



つまり、翻訳者自身は(A)側に留まり翻訳の作業を行おうと試みても、一旦取りかかるやいなや、そこでは二つの主体を乗り継がなくてはならない。しかもそのとき、まさに自分が言葉の持つ過剰(雑種性)を切り詰め、この二つの主体が実体として成立することに手を貸していることに気づかざるをえない。それは同時に翻訳者自身に「主体」というものが形象、すなわち虚構にすぎず、あるのは雑種的な「シュタイ」でしかないことを知らしめるのである。

そしてこの、翻訳と主体にまつわるアンビバレントな関係こそが、本書の副題に「翻訳と主体」を選んだ酒井氏の意図であると思われる。

VIII

そうであれば、「語り」のエチカも自ずと明らかになる。われわれはあくまでも、「語りかける」とことと「伝達する」とことを分けて考えなければならない。この両者が必然的に結びつくと考えるとき、絶対的外部に位置するもの、たとえば死者の言葉がやすやすと共同体の強化のために、ナショナリズムの言説に回収されてしまうのである。

そしてこの「語りかける」とことと「伝達する」とことの落差をまさに身を持って知るためには、われわれは何らかの意味で翻訳者になる必要がある。その一つの可能性として酒井氏は外国語学習を挙げている。それは学習者に固有だと思われ

た主体的立場を脱臼させ、学習者を予想外の社会的文脈のうちにと導いて行くと彼は言う。そこでわれわれは自らの「シュタイ」の雑種性に気づき、ノイズとしての身体性を意識することになるだろう。その時初めて、酒井氏の言う混成的共同体への可能性がわれわれの前に開かれて來るのである。そしてそれが可能なのは、「シュタイ」こそが実践を担うもの（実践作因）であるからである。

この本に対して本質的な水準で批判的なことを述べるのは難しい。安易な批判は知らず知らずのうちにナショナルなものを擁護する言説に回収されてしまう危険性を犯すことになる。ただし、一つだけ言えば、この本には形式的な難点がある。それはこの本がいくつかの論文を一つのテーマのもとにまとめたものであるため、繰り返しが多く、それが読者に全体として必要以上に難解な印象を与えているのである。

しかし、この本の質の高さや密度、またこの本 자체が酒井氏が英語で書いたものの第三者による翻訳（すなわち翻訳の実践）であるということを考えたとき、この本には最大限の賛辞を与えられる価値があるといってよいだろう。

先に、ここではこの本の中のすべての概念を紹介しきれなかったと書いたが、それらの概念の内には、「主觀」「時間の二重性」「普遍としての西洋」など重要なものがまだまだある。従って、こうしたことを確認するためにも、また何よりも自分たちの立っている場所を知るために、日本思想史研究者は無論のこと、あらゆる分野の人間にこの本は読まれるべきである。

（この書評はH-NETから転載したものです。）